教育研究実践報告誌
2021.3 第 4 巻第 2 号 pp.1-10

沼津市私立幼稚園における創造的保育実践の記録

―人を創る絵画活動とは―

長橋 秀樹

要旨：静岡県沼津市内において 1970 年代から市内私立幼稚園で絵画活動における人格形成を目的とした実践が続いている。その実践は主に油彩を描画材に使うなど，通常の幼児教育にはなじみの少ない希少なものである。その方法は共同制作の中で培う子どもたちの絶え間ない探求とお互いのコミュニケーションであった。本稿はこの実践の具体的内容を考察するため，現園長へのインタビューと共に園に残されていた膨大な作品と記録資料に基づいて紹介する。
キーワード：絵画、創造、教育

はじめに

幼児教育における，五領域は初等教育以降の教科に準ずる幼児教育（または保育）を形づくる根幹になっている。また近年，初等教育以降の教科性に関する横断的・融合的態度への注目はむしろ幼児教育（保育）における五領域の位置付けを追随しているかのように見える。つまり，元々相互に関連をもちながらそれぞれの領域が成り立っている五領域〈健康，人間関係，環境，言葉，表現〉的学びの姿が本質的な学びの認識につながることが今更ながら明らかになってきたとも言える。

近年，既存の幼稚園や保育所が認定こども園に移行する傾向は全国的に加速している。認定こども園とは平成 18 年度から施行された認定こども園制度によって規定された施設である。この制度の導入後，様々な懸案についての対策として「子ども・子育て支援制度」における認定こども園法一部改正法により，認定こども園の類型の一つである幼保連携型認定こども園を学校法人及び児童福祉施設としての法的位置づけを持つ単一の施設に改め，認可・指導監督を一本化した経緯があった。(1)

この改訂に伴い，幼保連携型認定こども園の教育課程その他の教育及び保育の内容に関する事項は，認定こども園法において，幼稚園教育要領（平成 20 年文部科学省告示第 26 号）及び保育所保育士指針（平成 20 年厚生労働省第 141 号）との整合性の確保や小学校における教育と円滑な接続に配慮しなければならないとされた。(1)

このような流れの中で現場施設は「教育」と「保育」の基本的な融合が求められることになる。ここでいう「教育」とは義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとしての満３歳以上の子どもに対して，教育基本法（平成 18 年法律第 120 号）に規定する法律で定める学校において行われる教育であり，また、ここでいう「保育」とは，保育を必要とする子どもに対して行われる児童福祉法（昭和 22 年法律第 164 号）に規定する保育である。(1)

このような保育現場の制度的改革が行われている中，本稿で取り上げる春の木幼稚園（園長：向坂武揚）も昭和 52 年創立後，私立幼稚園として運営してきたが，地域のニーズ

への対応へ向け，平成 31 年に幼稚園型認定こども園に移行する。それに伴い，旧園舎の老朽化や設備拡張の事由から建て替えを余儀なくされた。著者は現在，静岡県東部を中心としたビジュアルアーティストを募って構成した“EN”という名称のアーティスト団体の代表を任じている。某日，EN メンバーの人脈で春の木幼稚園から園舎建て替えのタイミング（認定こども園への移行）に合わせて，園に残されていた膨大（72 点）な油彩作品の保管問題が浮上し，今後のこれら作品の処遇と出来れば作品の展示企画を実現したいという依頼があった。園との数回の打ち合わせの中で，これらの油彩は園児たちと幼稚園教諭が協同で生み出したもので，さらに制作における克明なプロセス記録資料の存在も明らかになった。

春の木幼稚園　沿革

1977 年（昭和 52）学校法人向坂学園　春の木幼稚園　創立

初代園長：浅田正博　画家（洋画）新槐樹社所属（昭和 58 年設立）

現園長：向坂武揚

令和 2 年園舎改築

令和 3 年度 4 月より幼保連携型認定こども園に移行（2）

教育方針

1. 幼児の一人一人の個性をよく観察し，個々のよい芽生えを伸ばし，創造性豊かな人間に育てる。

2. 幼稚園の生活を通して集中力，根気力，自発性を高め，たくましい人間に育てる

3. 人の生命を大切にし，平和で国際感覚のある，心のやさしい人間に育てる。

上記の方針に則り，健康・人間関係・環境・言葉・表現，各領域を総合して幼児教育をする。

特に本園においては，各領域それぞれを関連させながら，調和的に保育をすることは言うまでもないが，特に「絵画を通して人間を創る」ことを中核に保育実践に努める。(3)

春の木幼稚園の「絵画を通して人間を創る」理念とは

上記の教育方針において“「絵画を通して人間を創る」ことを中核に保育実践に努める”というスローガンは初代園長である浅田正博氏の美術教育への深い思いの投影であろう。「絵画を通して人間を創る」と語る浅田氏には彼自身がひとりの画家として絵画制作実践の中で鍛えられた“対象から引き出される洞察力”，道具の使用に関わる“探求する力”，展覧会等の発表活動を通して得られる“社会へ向けてアウトプットする力”などの絵画活動にまつわる局面についての具体的実感があったのではなかろうか。このような力がひいては，子どもたちの成長に欠かせない集中力，根気，自発性の必要性につながっているのではないだろうか。

概歴　初代園長：浅田正博

昭和 13 年~14 年　渡仏

沼津市内公立中学校　美術教科担当

昭和 52 年（4 月）初代園長就任の傍ら、画家（洋画）でもあり美術団体“新槐樹社”（昭和 58 年設立）に所属
就任後、園構内に園長室兼アトリエを設置
平成 5 年（3 月）園長退任
平成 5 年から 6 年まで理事長就任（2）

新槐樹社について（沿革）
1958 年（昭和 33）創立‥前身は 1924 年（大正 13）結成の槐樹社。
その後槐樹社は，10 年で解散したが，堀田清治が新たに同志を募り 1958（昭和 33）に新槐樹社を創立。（4）
　堀田清治は 1899（明治 32）福井に生まれ，1920（大正 9 年）太平洋美術研究所（太平洋美術研究所は明治 22 年に発足した日本最初の洋画団体「明治美術会」として発展する）に所属する。（5）
　当団体は当時，工部美術学校（日本最古の美術学校）で教鞭をとっていたイタリア画家フォンタネージの影響を受けており，脂派と呼ばれる脂っぽい色調の画面が特徴的だったが高間惣七の指導の基，フォービズム（野獣派と呼ばれ，絵具を激しく画面に定着させ，絵具の物質感を覚醒させる）の洗礼を受けることになる。
　明治初期（1870~1900 年代）の西洋における美術界は，写実主義から印象主義さらに後期印象主義に絵画理念がドラスティックに変貌しているまさにその渦中だった。絵画が従来のロマン主義･写実主義的なプロパガンダの手段として援用されていた時代から決別し，絵画が表層（表面）を持ったひとつの実態であるというメタ認知的な絵画観が目覚める。
　このような絵画観が明治期の日本に概念と共に輸入され，近代日本絵画の骨組みが構築された。同時代に発足した槐樹社を前身に持つ新槐樹社に関わっていた浅田氏も当然，絵画の構造的思考に傾倒し，その実践を試みてきたと思われる。（7）

初代園長浅田正博の教育理念
美術教育を軸にした人間形成
個性と協働性を備えた人材育成

浅田氏が提案した当時の活動等
研修会：毎年（夏季）宿泊型（1～2 泊）
会場：東京都町田市「こひつじ幼稚園」
主催：東京幼年美術研究会　後援：美育文化協会　協賛：“ぺんてる”（教材企業）
鑑賞教育
ベルナール・ビュッフェ美術館（駿東郡清水町）などで本物の作品に触れる（7）

幼稚園教諭に様々な資料作りの課題
活動内容の記録資料
年間計画

昭和 61 年から絵画製作が本格的に開始
平成元年から油彩による共同制作開始（7）

資料：春の木幼稚園の絵画製作について

◇ 絵画を通じて人間を創る

序文　全文

「絵画，音楽，リズム活動，子どものつぶやき，すべて心の表現である。心を表現させることが如何に人間教育に大切であるかを真剣に考えたい。特に幼児期においては知識を吸収させることも大事であるが，それ以上に心を表現させることがより重要である。そのような手立てがないと心が固く閉ざされ,ゆがめられて人間形成においても欠陥を生じる。絵や物を創造することは人間の能力の特質ではないだろうか。絵を描くという仕事は子どもの表現の中で最も簡易な行為で，誰でもできる遊びである。どんな題材で描こうと，どんな用具で描こうと自由である。絵を描く喜びを通じて創造力を育て，人間生活においてこれから特に育てたい能力として集中力，根気，自発性を培いたい。美しいものを感ずる感性，表現することの喜びを通じて豊かな情操が育って行くものと考える。よって絵画を通じて創造性豊かな人間を作ることを一考してみたい。」（7）

考　察

人間教育において心の表現が不可欠であるという主張は，心の表現を生み出す仕組みの中に絵画や音楽，リズム活動が重要な価値として機能していることを伺わせる。その中で絵画が最も簡易な行為であるという指摘も，幼児が落ちていた棒っ切れで土へ思いのままに落書きをするなど，表現に至る垣根が低いことを示唆している。

◇ 大切な 3 歳児　抜粋

・絵画製作という領域だけのことでなく，絵画を通じて人間を育てる立場になると，作品の結果はあまり問題としない。
・3 歳児の絵はちょっと見たところ，何を描いているのかよくわからないが，話を聞いてみると絵画の中にその子のお話が出ている。
・一本の線でも子ども達に聞いてみると,「おかあさん」「だんご」「へび」等全部意味がある。当園では，教師は子ども達が何を描いたのか，細かく聞いてあげ，鉛筆で記入している。
・子どもの心を開放するために，クレパスでぐるぐる散歩を取り入れている。これは，ケント全紙に 5~6 人のグループで，鉛筆やマーカーで思い切り自由に描かせる。
・テンポのよいレコードをかけて，雰囲気を和らげてみると，子どもがより一層はりきって描き遊ぶ。
・6 月に入ると絵具遊び。不定形の小さな紙の画用紙を「おふろに入れてあげよう」と言いながら，バケツの中の水の中に入れて画用紙をぬらす。パレットに入っている絵具の色を指でつけながら，そのぬれた画用紙にポツンポツンとハンコみたいに押す。（7）

考　察

園内で発達段階の最も低い３歳児への浅田氏の眼差しは，幼児の活動の中に起きている様々な局面に反応しており，特に幼児が描き出した１本の線をめぐり，幼児の発した些細なつぶやきをきっかけに，その子の内面の世界を引き出す可能性を暗示している。線描（ドローイング）活動の導入についても，描画材と支持体（紙等）があれば物理的には誰でも容易に始めることが出来き，幼児の警戒心を和らげる効果を期待している。加えて，支持体（紙等）へアクション（不定形に切る又は破る・バケツの水でぬらす）を積極的に働き掛けることで，描くものと描かれるものとの関係性が曖昧（ポジティブな意味で）になり，描くことへの垣根を和らげている。

◇ 絵画日

・年間を通して，月に１度は全園児で，絵画日として絵を描く日を設けている。

・その理由として，子どもの絵に対する集中時間がとても長くなってきており，１日では活動が終わらなかったり，又は、もう１日絵を描きたいという声が聞かれたりしたからである。絵画日という共通の活動が園全体を同じ気持ちに統一し，子ども達の“描こう”という意欲を強めている。絵は描きっぱなしではいけない，描いたあとに，その絵について話し合いを行う。絵画日が終わった後は，体育館に子どもの作品を全部並べて，園内研修を行う。ねらいや手順，子ども達の様子を報告し，さらに個々の子どもの変化や成長，絵画以外における活動に至るまで，教師全員が真剣に話し合っている。(7)

考　察

描く行為を特別なものと捉えるのではなく，日常の行為の一部として馴染ませることによって，子どもたちの中に描く行為が自然な身振りであることを定着させている。さらに描いた後の振り返りの時間確保は互いの視点から自他の行為の痕跡を見合うことで，描いた時間がどのような思いを投影された時間だったのかを共有し，各々が自覚する貴重な体験となる。

◇ 芸術祭　<教師著>

・一年間の総括として毎年２月に芸術祭作品展を行う。

・最近は，父兄の中にも他の子と比べたりするのはなく，我が子の成長を喜びながら，園全体を見る広い視野が養われてきた。自分の作品に自信を持ってきたように思う。

・私たちは，子どもを育てているのであり，その一つのきっかけとして絵画製作をしているのだと考えたい。私たちの作品は子どもであり，“子ども”なのであり子ども達がいいから，いい絵が生まれるのだと思う。

・芸術祭の反省会で「今後一切コンクールへの出品はやめようではないか」という事が話し合われた。私たちの目指すものは，コンクールで特選をとる事ではないからだ。作品主義になったら，今ある春の木幼稚園の芸術祭は消えてなくなる。そればかりでなく，教育方針も少し

違ってきてしまうような気がする。子どもの息吹の感じられる素朴さの中にセンスを加え，その子らしいチャーミングな表現がされることを望み，柔軟性のある頭と心で，改める事は改めながらいつもフレッシュなものを考えてゆきたい。(7)

考　察

いわゆる保護者教育のひとつとして，卑近な表現の比較がいかに空しいことなのかを保護者へ向けて諭し、大事なことは我が子の成長を認め、他の子どもの多様な表現の固有の価値をも認めることである。絵画製作はあくまでも，子どもが成長するバロメーターの指針であり，育てているのは作品ではなく子どもそのものなのだと浅田氏は説いている。

◇絵画制作カリキュラム　テーマ：〈集中・根気・独自性〉

年少（3 歳児）
テーマ「はじめて描いた絵」
材料：マーカー、画用紙
ねらい：子ども達がどの程度か？どのような絵の描き方をするのかを知る

テーマ「ぐるぐるおばけ」

材料：クレパス、大型画用紙
ねらい：おばけに対する恐怖心がない為，ぐるぐるおばけを描き，気持ちを発散，教師との信頼関係を築く
園児の様子
・ほとんどの子が，うずまきを描いていたが，数人ぐるぐるが重なっている子もいた
・かたつむりのぐるぐるということで，子どもにとって身近な存在であり，歌を口ずさむほど喜んでいた（7）

考　察

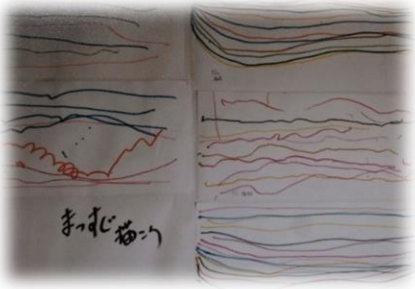
要旨の文中で春の木幼稚園の絵画実践の特徴として油彩画を取り上げたが，繰り返しになるが，そもそもこの浅田氏が関わっていた油彩画は美術史における近代から現代にかけて展開した油彩画の概念である。決して，中世以前の歴史画をはじめとするその時代の政治がらみの文脈を読み解かせるテキスト的絵画ではないことを確認したい。その上で，浅田氏が春の木幼稚園の絵画活動で積極的に取り込んでいる，ﾄﾞローイング（線描画）は近代以降絵画領域で注目されてきた概念，つまり“身体性”という概念を顕在化させた描画法であった。　絵画は描く，つまり筆を持ってキャンバスに絵の具を描き付ける作者（人間・身体）の存在抜きに成立しえないという自明の理である。浅田氏は絵画活動の第一歩はﾄﾞローイング（線描画）であると確信し，ドローイングを実践する上で最も有効な描画材としてマーカーやクレパスを選択したのである。

テーマ「へび・おせんべい」

材料：イーゼル、クレパス、大型画用紙
ねらい：ゆっくり長い線を描く，ゆっくりまるを描く、マーカーは圧力の加え方が苦手な子でも簡単に描くことができる。(7)

年中（4 歳児）

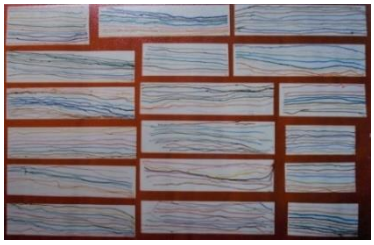
テーマ「はじめてのマーカー」〈線や丸を描く〉



　材料：マーカー、不定形の画用紙
ねらい:マーカーの取扱いを覚える､線をゆっくり描く，いろいろな色を抵抗なく使える
　楽しくマーカーで遊ぶ, 落ち着いて丁寧に活動に向かうこと，根気の育成

園児の様子

・線がぶつからないように，ゆっくりと丁寧に描いている子どもが多い
・話をよく聞かずにいて，線や丸以外の物を描く子どもも見受けられた
・緊張感があり，マーカーの取扱いなどはきちんとできている
・色も全部の色をほとんどの子どもが使える
・はじめて，何を描くのか？と不安な子も自身を持って描ける題材なので，嬉しそうだった。(7)



年長（5 歳児）

テーマ：「うずまきデザイン」

　・絵画製作に大事なことは,子どもにふさわしい環境設定してやることである。絵を描いてみたくなるような場をつくってやることである。何といっても教育の効果はよき教師であり，よき教師とは何か。よき雰囲気をつくる人である。個々の子どもとの信頼関係が確立されていなくてはならない。よき

教師は自分の考えを押し付けるのではなく，子どもの個々のアイデアを引き出してやる存在でなくてはならない。ここに教師の大事なセンスが必要となる。子どもの個々のよき助言者であり，理解者でなくてはならない。（中略）

子どもの作品の結果だけにとらわれないで，子どもの発想、製作態　度（集中力・根気・自発性）等を褒めてやる教師でありたい。特に子どもの製作の過程そのものが教育の対象と考える教師でありたい。そういう教師が絵画を通じて人間を作る教師であると私たちは信じてやまない。(7)

考　察

年少から年長になるに従って，子ども達が捉えるドローイングとの距離感が次第に変容してゆく。年少・中は線とともに目の前に起きる現象をひたすら探求し、年長になると年中までの探究活動から得られた素材（描画材と支持体）感が身近なものと化し，意味と様式を見出す段階に進化してゆく。ここに登場する幼稚園教諭は前述にあるような子ども達のドローイングを通した固有の経験や記憶を尊重した上で，子ども達と積極的にコミュニケートしている。決して大人の目線から子ども達の描かれたものを読み取ってはいない。

◇共同画　構想画「とり」年長（5 歳児）素材：キャンバス（138×250 cm），油彩，色画用紙

園児の様子

・9 月の初めは共同で描く経験がないので，他人まかで話合いもできずにいた。意欲を高める為，資料収集を行った。次第に話し合いで自己を出したり，役割分担をして活動が活発になってきた。

・話し合いを多くする中，自分の意見を言ったり，受け入れたり協調してゆき，他の活動でも，同じグループでも仲間意識を深めてゆき，共同で絵を描く楽しさを知らせ，完成までの長い間，根気よく行う。(7)

考　察

共同制作ではテーマ：鳥について，幼稚園教諭も加わり意見交換後，個々のイメージを引き出す時間の確保を保障していた。その後，互いのイメージを視覚的に共有し，大きな画用紙にフルスケールの下絵を描く。子ども達にとってこのサイズ（145×250cm）の画面は自らの身体が吸い込まれていくような感覚だろう。広々とした画面空間へ思い思いに鳥を羽ばたかせている子ども達の表情は自分が鳥になった気分でその思いを画面に投影しているようである。

鉛筆で下絵を描く

○その他の共同制作作品

素材：油彩・コンテ/サイズ：145×250 cm

素材：油彩・コンテ/サイズ：145×250 cm

まとめ

1976 年（昭和 51)、文部省は教育課程審議会に小・中・高等学校の教育課程改善についての諮問に対して，答申を提出。答申には次のような三つのねらいが示されていた。

1. 人間性豊かな生徒を育てること
2. ゆとりあるしかも充実した学校生活が送れるようにすること
3. 国民として必要とされる基礎的･基本的な内容を重視するとともに児童生徒の個性や能力に応じた教育が行われるようにすること

金子（2003）は「この時代は，1960 年代の第二次高度成長によって，日本経済が拡大し，西洋諸国と肩を並べたという心理的安心感から，ゆとり教育という新しい理念が生み出された時であった。」(6) と当時の情勢を振り返っている。ここに登場する春の木幼稚園も当時の浅田園長の教育理念の下，個々の子ども達に芽生えた感性を小さな社会（幼稚園内）の中で，ゆっくりとしたテンポで優しく見守りながら育て，個の世界観をたくましく伸ばす、ゆとりある教育を先取りしていた。とりわけ油彩による共同制作について著者が驚いたのは，共同画の制作プロセスの構造が正統な美術教育を受けて熟達した絵描きが辿る作業行程とほぼ同等の内容を持っていた点である。一般的に幼児教育を対象にプロフェ

ッショナルなメソッドが馴染むのかと疑問に思うかもしれないが，実は正当なメソッドの底辺に在る理念，つまり“如何に内面に在る思いを簡潔かつパワフルに視覚化するのか”という「表現の顕在化」へ向けて的確にフォーカスするという命題が横たわっている。その命題を起点に展開する浅田氏の教育は注目に値する実践である。さらに，記録資料については日常の保育の中で出会う子ども達の行為から表現の芽を照らし出す，現職の保育者の質の高い眼差しによって克明に子ども達の気づきや些細な言動に至るまで写真画像とともに残されていた。これら資料はその後の活動の展開へ有効にフィードバックされることが期待できる。このような記録資料作成は現在でも継続されており，今後の春の木幼稚園，さらには沼津市の美術教育にとって貴重な財産となることだろう。

参考文献

（1）「幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説」内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 27 年 2 月

（2）現職園長　向坂武揚氏からのインタビューから

（6）金子一夫著　「美術科教育の方法論と歴史」央公論美術出版　平成 15 年

引用資料

（3）春の木幼稚園公式ホームページより　https://harunoki.com/

（4）新槐樹社HP　新槐樹社沿革　http://www.shinkaijusha.jp

（5）東京文化財研究所HP　　堀田清治 https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10110.html

（7）春の木幼稚園　資料：絵画製作帖（絵画共同画）　絵画製作年間保育計画